『朱子語類』巻二六～巻二九訳注（二〇）

二松学舎大学宋明資料輪読会里仁篇班

序言

本稿は、『中國哲學』第四十九號（北海道大學中國哲學會、令和四年發行）に掲載の『朱子語類』巻二六～巻二九訳注（一九）」の続稿である。本訳注（二十）は巻二七里仁篇下「子曰參乎章」を検討し、報告する。訳注（一）の巻頭に記した「序言」「凡例」は、原則として本稿においても踏襲しているので、（一）を参照されたい。なお、割注は、小字とせずに【　】に入れた。

輪読会里仁篇班の参加者は、石原伸一（茨城高等学校・中学校教諭）、岡野康幸（群馬医療福祉大学専任講師）、小幡敏行（横浜市立大学教授）、久米晋平（秀明大学専任講師）、中根公雄（二松學舎大学非常勤講師）である。

各条の担当者は、巻二七里仁篇下「子曰參乎章」（里15・44～50）が中根公雄である。

[里15] 子曰參乎章

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。【參、所金反。唯、上聲。○參乎者、呼曾子之名而告之。貫、通也。唯者、應之速而無疑者也。聖人之心、渾然一理、而泛應曲當、用各不同。曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之、但未知其體之一爾。夫子知其眞積力久、將有所得。是以呼而告之。曾子果能默契其指。卽應之速而無疑也。】子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。【盡己之謂忠、推己之謂恕。而已矣者、竭盡而無餘之辭也。夫子之一理渾然而泛應曲當、譬則天地之至誠無息、而萬物各得其所也。自此之外、固無餘法。而亦無待於推矣。曾子有見於此、而難言之。故借學者盡己推己之目、以著明之。欲人之易曉也。蓋至誠無息者、道之體也。萬殊之所以一本也。萬物各得其所者、道之用也。一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實可見矣。或曰、中心爲忠、如心爲恕。於義亦通。○程子曰、以己及物仁也。推己及物恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之。忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用。大本達道也。此與違道不遠異者、動以天爾。又曰、維天之命、於穆不已、忠也。乾道變化、各正性命、恕也。又曰、聖人教人、各因其才。吾道一以貫之、惟曾子爲能達此。孔子所以告之也。曾子告門人曰、夫子之道、忠恕而已矣。亦猶夫子之告曾子也。中庸所謂忠恕違道不遠、斯乃下學上達之義。】

[里15・44／二七・四十四](1)

本　文

子貢尋常自知識而入道、【人傑錄作自敏入道。】故夫子警之曰、汝以予爲多學而識之者歟。對曰、然。非與。曰、非也、予一以貫之。蓋言吾之多識、不過一理爾。曾子尋常自踐履入、事親孝、則真箇行此孝、爲人謀、則真箇忠、朋友交、則真箇信。故夫子警之曰、汝平日之所行者、皆一理耳。惟曾子領略於片言之下、故曰、忠恕而已矣。以吾夫子之道無出於此也。我之所得者忠、誠即此理、安頓在事物上則爲恕。無忠則無恕、蓋本末、體用也。【去僞。以下兼論子貢章】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

子貢は尋常知識よりして道に入る、【人傑[1]の錄に敏より道に入るに[2]作る。】故に夫子之を警めて曰はく、「汝 予を以て多く學びて之を識す者と爲すか[3]、と。對へて曰はく、然り。非なるか[4]、と。曰はく、非なり、予は一以て之を貫く[5]」と。蓋し吾の多識は、一理に過ぎざるのみと言ふ。曾子は尋常踐履より入る、親に事へて孝なれば、則ち真箇に此の孝を行ひ、人の爲に謀れば[6]、則ち真箇に忠にして、朋友と交はれば[7]、則ち真箇に信なり。故に夫子之を警めて曰はく、汝平日の行ふ所の者は、皆一理のみ、と。惟だ曾子は片言の下に領略す、故に曰はく、「忠恕のみ」と。以へらく吾が夫子の道は此より出づること無きなり、と。我の得る所の者は忠にして、誠に即し此の理、安頓し事物上に在れば則ち恕と爲る。忠無ければ則ち恕無く、蓋し本末、體用なり。【金去僞[8]。以下兼ねて子貢の章を論ず。】

口語訳

子貢はいつも知識から道に進もうとする。【萬人傑の録には明敏さから道に進むとしている。】そこで孔子は戒めて、「汝予を以て多く学びて之を識す者と為すか、と。対へて曰はく、然り。非なるか、と。曰はく、非なり、予は一以て之を貫く」と言ったのである。思うに孔子が私が物知りなのは、一理に過ぎないと言っているのだ。

曾子はいつも実践から進もうとする。親に孝行するという点では、本当にこの孝を尽くし、他人の為に行動すれば、本当に真心をもって当たり、友達と交際すれば、本当に誠実に対応する。そこで孔子は戒めて、「お前が普段行っていることは、すべて一理にほかならない」と言った。ただ曾子は一言のもとに理解して、そこで「忠恕のみ」と言った。わが孔子の道はこのことから離れることは無いと思ったのだ。自己の得たものが忠であり、もしもこの理が、事物上に在れば恕となる。忠が無ければ恕も無く、思うに本末、体用（の関係）である。【金去僞録。以下は子貢についての章を併せて論ず。】

注

（1）人傑―「人傑」は、萬人傑。萬人傑は本訳注（三）の（里4・1）条に既出（その注（1）を参照）。楠本本には、人傑録として「子貢平日自敏入道。故夫子警之曰、【云云】蓋言吾雖多識、不過一理爾。曾子尋常踐履。故夫子警之曰、【云云】蓋言女平日之所行者、皆一理耳。惟曾子知之、故曰、忠恕而已。以吾夫子之道無出於此也。蓋本言體用也。【人傑】」と見える。

（2）敏より…に入る―「敏」は、『論語』公冶長篇第十四章に「子貢問曰、孔文子何以謂之文也。子曰、敏而好學、不恥下問。是以謂之文也」とある。

（3）汝予を…爲すか―「汝以予爲多學而識之者歟」は、『論語』衛霊公篇第二章に「子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與。對曰、然。非與。曰、非也。予一以貫之」とある。『集注』は、「子貢之學、多而能識矣。夫子欲其知所本也。故問以發之」、「方信而忽疑。蓋

其積學功至、而亦將有得也」、「説見第四篇。然彼以行言、此以知言也。○謝氏曰、聖人之道大矣。人不能徧觀而盡識。宜其以爲多學而識之也。然聖人豈務博者哉。如天之於衆形、匪物物刻而雕之也。故曰、予一以貫之。德輶如毛。毛猶有倫。上天之載、無聲無臭。至矣。尹氏曰、孔子之於曾子、不待其問而直告之以此。曾子復深喩之曰唯。若子貢則先發其疑、而後告之。而子貢終亦不能如曾子之唯也。二子所學之淺深、於此可見。愚按、夫子之於子貢、屢有以發之、而他人不與焉。則顔曾以下、諸子所學之淺深、又可見矣」と注する。

（4）對へて…なるか―「對曰、然。非與」は、本条注（3）に既出（その注（3）を参照）。

（5）曰はく…を貫く―「曰、非也、予一以貫之」は、本条注（3）に既出（その注（3）を参照）。

（6）人の爲…謀れば―「爲人謀」は、『論語』学而篇第四章に「曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎」とある。『集注』は、「曾子、孔子弟子、名參、字子輿。盡己之謂忠、以實之謂信。傳、謂受之於師。習、謂熟之於己。曾子以此三者、日省其身、有則改之、無則加勉。其自治誠切如此。可謂得爲學之本矣。而三者之序、則又以忠信爲傳習之本也。○尹氏曰、曾子守約、故動必求諸身。謝氏曰、諸子之學、皆出於聖人。其後愈遠、而愈失其眞。獨曾子之學、專用心於内。故傳之無弊。觀於子思孟子可見矣。惜乎其嘉言善行、不盡傳於世也。其幸存而未泯者、學者其可不盡心乎」と注する。

（7）朋友と…はれば―「朋友交」は、本条注（6）に既出（その注（6）を参照）。また學而篇第七章に「子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣」とある。

（8）去僞―「去僞」は、金去僞は本訳注（一三）の（里6・21）条に既出（その注（5）を参照）。

［里15・45／二七・四十五］

本　文

夫子於子貢見其地位、故發之。曾子已能行、故只云吾道一以貫之。子貢未能行、故云賜、汝以予爲多學而識之。【可學〔〕】

校　勘

（1）可學―楠本本は、記録者を欠く。

訓　読

夫子 子貢に於ける其の地位を見る、故に之を發す。[1]曾子は已に能く行へり、故に只だ「吾が道は一以て之を貫く」と云ふのみ。子貢は未だ行ふ能はず、故に「賜や、汝予を以て多く學びて之を識すと爲すか[2]」と云ふ。【鄭可學[3]】

口語訳

孔子は子貢の程度を見て、そこで啓発しようとした。

曾子はもう実践できた、そこでただ「吾が道は一以て之を貫く」と言われた。

子貢はまだ実践できなかった、そこで「賜や、汝予を以て多く学びて之を識すと為すか」と言われた。【鄭可學録】

注

（1）故に之を發す―「故發之」は、『論語』衛霊公篇第二章の『集注』に見える。前の（里15・44）条に既出（その注（3）を参照）。

（2）賜や、汝…爲すか―「賜、汝以予爲多學而識之」は、前の（里15・44）条に既出（その注（3）を参照）。

（3）可學―「可學」は、鄭可學。鄭可學は本訳注（三）の（里2・13）条に既出（その注（1）を参照）。

［里15・46／二七・四十六[1]］

本　文

所謂一貫者、會萬殊於一貫。如曾子是於聖人一言一行上一一踐履、都子細理會過了、不是默然而得之。觀曾子問中問喪禮之變、曲折無不詳盡、便可見曾子當時功夫是一一理會過來。聖人知曾子許多道理都理會得、便以一貫語之、教它知許多道理却只是一箇道理。曾子到此、亦是它踐履處都理會過了、一旦豁然知此是一箇道理、遂應曰、唯。及至門人問之、便云忠恕而已矣。忠是大本、恕是達道。忠者、一理也、恕便是條貫、萬殊皆自此出來。雖萬殊、却只一理、所謂貫也。子貢平日是於前言往行上著(2)工夫(3)、於見識上做得亦到。夫子恐其亦以聖人爲多學而識之、故問之。子貢方以爲疑、夫子遂以一貫告之。子貢聞此別無語、亦未見得子貢理會得、理會不得。自今觀之、夫子只以一貫語此二人、亦須是它承當得、想亦不肯說與領會不得底人。曾子是踐履篤實上做到、子貢是博聞強識上做到。夫子舍二人之外、別不曾說、不似今人動便說一貫也。所謂一者、對萬而言。今却不可去一上尋、須是去萬上理會。若只見夫子語一貫、便將許多合做底事都不做、只理會一、不知却貫箇甚底。【𤣥】

校　勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。
(2) 著―「著」は、正中書局本・和刻本は「着」に作る。
(3) 工夫―「工夫」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本は「功夫」に作る。

訓　読

所謂一貫とは、萬殊を一貫に會す。曾子の如きは是れ聖人の一言一行の上に於いて一一踐履し、都て子細に理會し過ぎ了はり、是れ默然として之を得るに不ず。曾子問の中の喪禮の變を問ふを觀るに、曲折の詳盡せざるは無く、便ち曾子の當時の功夫は是れ一一理會し過ぎ來るを見る可し。聖人は曾子の許多の道理をば都て理會し得るを知りて、便ち一貫を以て之に語げ、它をして許多の道理は却つて只是だ一箇の道理のみなるを知らしむるなり。曾子此に到りて、亦是た它の踐履する處は都て理會し過ぎ了はり、一旦豁然として此の是れ一箇の道理なるを知りて、遂に應へて曰はく、「唯」と。門人の之を問ふに至るに及び、便ち「忠恕のみ」と云へるなり。忠は是れ大本にして、恕は是れ達道なり。[2] 忠とは、一理なり、恕は便是ち條貫にして、萬殊皆此より出で來る。萬殊と雖も、却つて只だ一理のみ、所謂貫くなり。子貢は平日是れ前言往行の上に於いて工夫を著け、見識の上に於いて做し得て亦た到る。夫子其の亦た聖人を以て「多く學びて之を識す」[3]と爲さんことを恐れ、故に之を問ふ。子貢は方に以て疑と爲し、夫子遂に一貫を以て之に告ぐ。子貢此を聞きて別に語る無く、亦た未だ子貢の理會し得るか、理會し得ざるかを見得せず。今より之を觀れば、夫子は只だ一貫を以て此の二人に語ぐるは、亦た須是らく它をば承當し得べく、想ふに亦た肯へて領會し得ざるの人に說與せざらん。曾子は是れ踐履篤實の上に做し到り、子貢は是れ博聞強識の上に做し到る。夫子二人を舍くの外、別に曾て說かず、今の人動れば便ち一貫を說くが似くならざるなり。所謂一とは、萬に對して言ふ。今却つて去きて一の上に尋ぬ可からず、須是らく去きて萬の上に理會すべし。若し只だ夫子の一貫を語ぐるを見るのみにして、便ち許多の合に做すべきの事を將て都て做さず、只だ一を理會するのみなれば、却つて箇の甚底を貫くかを知らざらん。【黃榥[4]】

口語訳

いわゆる一貫とは、諸々の異なり（萬殊）を一つ（一貫）にする。曾子の場合は聖人の言行について逐一実践し、みな詳細に理解することができ、物言わずに悟ったのではない。（『礼記』）曾子問の中での喪礼の変礼についての質問を見ると、曲折について極めつくしており、曾子の当時の工夫で逐一理解できていたことが分かる。聖人は曾子が許多の道理をみな理解できたことを知って、すぐに「一貫」を告げ、それによって許多の道理はただ一箇の道理だけであることを知らしめたのである。曾子もここに至って、実践するところはみな理解できて、一朝にしてからりとこの道理を悟り、かくて「唯」と返事をしたのである。門人に質問されて、「忠恕のみ」と言ったのである。忠は（『中庸章句』第一章）大本（根本）にして、恕は達道（天下共に由る所の道）である。忠とは、一理であり、恕はつまり条貫（筋道）で、萬殊はすべてここから起こる。萬殊ではあるけれども、ただ一理なのであり、いわゆる貫くのである。子貢は普段古の聖賢の言行について工夫を積み、知識上で成就する。夫子は彼らが聖人を「多く学びて之を識す」と見なしはせぬかと心配し、故にこう質問したのである。子貢は疑心を抱いていたので、夫子はかくて「一貫」を告げた。子貢はこの語を聞いて何も語らず、子貢は理解できたのか、理解できなかったのか分からない。今から考えてみると、夫子は「一貫」をこの二人だに告げたのは、それに応えられるはずで、思うに理解できない人には言って聞かせようとしないだろう。曾子は篤実に実践してやり遂げ、子貢は博聞強記でやり遂げる。夫子は二人を除いて、他には説かなかった。今の人がともすればすぐに一貫を説くようではない。いわゆる一とは、萬に対して言う。今は一の上で探求すべきではなく、必ず萬の上で理解しなければならない。もし夫子が一貫を告げたことを見るだけで、許多の当然すべき事を全くしないで、ただ一を理解するだけならば、かえって何を貫くか分からないだろう。【黄榦録】

注

（1）曾子問…を問ふ―「曾子問中問喪禮之變」は、『礼記』曾子問篇に普通と異なった礼が説かれている。

（2）忠は是…道なり―「忠是大本、恕是達道」の「大本」「達道」は、『中庸』の語。『中庸章句』第一章に「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉」とあり、朱子は「喜怒哀樂、情也。其未發、則性也。無所偏倚、故謂之中。發皆中節、情之正也。無所乖戾、故謂之和。大本者、天命之性、天下之理皆由此出、道之體也。達道者、循性之謂。天下古今之所共由、道之用也。此言性情之德、以明道不可離之意」と注する。また第二十章には「天下之達道五、所以行之者三。曰、君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者天下之達道也。知仁勇三者天下之達德也。所以行之者一也」とあり、朱子は「達道者、天下古今所共由之路、卽所謂五典、孟子所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、是也。知所以知此也。仁所以體此也。勇所以強此也。謂之達德者、天下古今所同得之理也。一則誠而已矣。達道雖人所共由、然無是三德、則無以行之。達德雖人所同得、然一有不誠、則人欲閒之而德非其德矣。程子曰、所謂誠者、止是誠實此三者。三者之外、更別無誠」と注し、第三十二章には「唯天下至誠、爲能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育。夫焉有所倚」とあり、朱子は「經綸、皆治絲之事。經者理其緒而分之、綸者比其類而合之也。經、常也。大經者五品之人倫、大本者所性之全體也。惟聖人之德、極誠無妄。故於人倫、各盡其當然之實。而皆可以爲天下後世法。所謂經綸之也。其於所性之全體、無一毫人欲之僞以雜之。而天下之道、千變萬化、皆由此出。所謂立之也。其於天地之化育、則亦其極誠無妄者、有默契焉。非但聞見之知而已、此皆至誠無妄、自然之功用。夫豈有所倚著於物而後能哉」と注する。

（3）多く學…を識す―「多學而識之」は、『論語』衞靈公篇第二章に見える語。（里15・44）条に既出（その注（3）を参照）。

（4）瞀―「瞀」は、黄瞀。黄瞀は本訳注（一三）の（里6・11）条に既出（その注（2）を参照）。

［里15・47／二七・四十七］

本　文

忠恕、一以貫之。曾子假忠恕二字、以發明一貫之理。蓋曾子平日無所不學。看禮記諸書、曾子那事不理會來。但未知所以一、故夫子於此告之、而曾子洞然曉之而無疑。賀孫問、告子貢一以貫之章、集注云、彼以行言、此以知言。是就二子所到

上說、如何。曰、看上下語脉是如此。夫子告曾子、曾子只說、夫子之道、忠恕而已矣。這就行上說。夫子告子貢乃云、汝以予爲多學而識之者與。這是只就知上說。賀孫因舉大學或問云、心之爲物、實主於身。其體、則有仁義禮智信[1]之性。其用、則有惻隱、羞惡、恭敬、是非之情。渾然在中、隨感而應。以至身之所具、身之所接、皆有當然之則而自不容已、所謂理也、元有一貫意思。曰、然。施之君臣、則君臣義。施之父子、則父子親。施之兄弟、則兄弟和。施之夫婦、則夫婦別、都只由這箇心。如今最要先[2]理會此心。又云、通書一處說陰陽五行、化生萬物、五殊二實、二本則一、亦此意。又云、如千部文字、萬部文字、字字如此好、面面如此好、人道是聖賢逐一寫得如此。聖人告之曰、不如此。我只是一箇印板印將去、千部萬部雖多、只是一箇印板。又云、且看論語、如鄉黨處、待人接物、千頭萬狀、是多少般。聖人只是這一箇道理做出去。明道說忠恕、當時最錄得好。【賀孫】

校　勘

(1) 信―「信」字は、正中書局本・朝鮮整版本・楠本本には無い。
(2) 先―「先」は、楠本本は「先」の下に「且」字が有る。

訓　読

「忠恕」、「一以て之を貫く」と。曾子「忠恕」の二字を假りて、以て一貫の理を發明す。蓋し曾子は平日學ばざる所無し。禮記諸書を看れば、曾子那(なん)の事か理會せざらんや。[1]但だ未だ一なる所以を知らず、故に夫子此に於て之に告げ、而して曾子洞然として之を曉りて疑ひ無し。賀孫[2]問ふ、子貢に一以て之を貫くを告ぐる章、集注に云へり、彼は行を以て言ひ、此

は知を以て言ふ、と。[3] 是れ二子の到る所の上に就きて說く、如何、と。曰はく、上下の語脉を看るに是れ此くの如し。夫子 曾子に告げ、曾子只だ說く、「夫子の道は、忠恕のみ」と。這れは行の上に就きて說く。夫子 子貢に告げて乃ち云ふ、「汝予を以て多く學びて之を識る者と爲すか」と。這れは是れ只だ知の上に就きて說く、と。賀孫因りて大學或問を擧げて云ふ、心の物爲る、實に身に主たり。其の體は、則ち仁義禮智信の性有り。其の用は、則ち惻隱、羞惡、恭敬、是非の情有り。渾然として中に在り、感に隨ひて應ず。以て身の具ふる所、身の接する所に至りては、皆 當然の則有りて自ら容に已むべからず、所謂 理なり。[4] 元より一貫の意思有り、と。曰はく、然り。之を君臣に施せば、則ち君臣義あり。之を父子に施せば、則ち父子親あり。之を兄弟に施せば、則ち兄弟和あり。之を夫婦に施せば、則ち夫婦別あり。都て只だ這箇の心に由る。如今最も先づ此の心を理會せんことを要す、と。又云ふ、通書の一處に陰陽五行は、萬物を化生す、五殊二實、二は本より則ち一。[5] と說くも、亦た此の意なり、と。又云ふ、如へば千部の文字、萬部の文字、字字此くの如く好く、面面此くの如く好く、人是れ聖賢逐一に寫し得ること此くの如しと道ふ。聖人之に告げて曰はく、如くの此くならず、と。我只是だ一箇の印板もて印し將て去く、千部萬部は多しと雖も、只是だ一箇の印板のみ、と。又云ふ、且らく論語を看るに、**鄉**黨[6]等の處の如きは、人を待し物に接するに、千頭萬狀、是れ多少の般なり。聖人只是だ這の一箇の道理もて做し出だし去く。明道の忠恕を說く[7]は、當時最も錄し得て好し、と。【葉賀孫[8]】

口語訳

「忠恕」、「一以て之を貫く」と。曾子は「忠恕」の二字を借りて、一貫の道理を明らかにした。曾子は普段から学ばないことがない。『礼記』その他の書物を見ると、曾子は何でも理解しないことがあろうか。しかしまだ一であるとは知ら

なかったので、孔子はここで曾子に教え、曾子ははっきりと悟って疑うことがなかった。

賀孫（わたくし）は質問した、「子貢に「一以て之を貫く」を語った章、その集注にいう、「あちら（曾子）は行について言い、こちら（子貢）は知について言う」と。これは二子の到達した程度上から言ったものです。どうでしょうか」と。

答えて言う、「（『論語』経文の）前後の文脈から見てこのとおりである。孔子は曾子に告げ、曾子はただ「夫子の道は、忠恕のみ」と言った。これは行の上から言っている。孔子が子貢に告げた場合には、「汝 予を以て多く學びて之を識る者と爲すか」と。これはただ知の上から言っているのだ」と。

賀孫はそこで『大学或問』を挙げて言う、「心という物は、まことに身にとっては主体である。その本体としては、仁義禮智信という性を有している。その作用としては、惻隱、羞悪、恭敬、是非という情を有している。渾然として（心の）中にあり、感ずるに随って応ずる。そして身にそなわっているもの、身が接することになると、みな当然の則（そうすべき原則）が有ってそもそも止めてはならない、いわゆる理であり、もともと一貫（一理を以て万事を貫く）の意味が有ります」と。

答えて言う、「その通りである。これを君臣に推し及ぼせば、君臣の間には義、これを父子に推し及ぼせば、父子の間には親、これを兄弟に推し及ぼせば、兄弟の間には和、これを夫婦に推し及ぼせば、夫婦の間には別（という、それぞれ道徳）が有り、すべてはこの心がもとになっている。今は最優先してこの心を理解しようとすることが大切である」と。

また言う、「（周敦頤の）『通書』のある箇所に「陰陽五行は、萬物を生み出すが、五つの異なり（五行）も二つの（陰陽という）実体であり、二つ（の陰陽の気）も元々それは一つ」と説くのも、またこの意味である」と。

また言う、「たとえば千部、万部の書物について、一言一句かくも素晴らしく、どの面もかくも素晴らしく、人々は聖

賢が一つ一つこのように書いたのだと言う。聖人はこれに告げて言う、そのようなものではない。我々はただ一個の版木で印刷していく、千部万部は多いけれども、ただ一箇の版木だけなのだ」と。

また言う、「『論語』を見ると、**鄉**党篇等の場合は、人に応対し物に接するとなると、多種多様である。聖人はただ一つの道理で行っていく。明道が忠恕を説くのは、目下のところ一番よく記録している」と。【葉賀孫録】

注

（1）曾子那…らんや―「曾子那事不理會來」の「來」は、文末の助字。三浦國雄『「朱子語類」抄』を参照。

（2）賀孫―「賀孫」は、葉賀孫。葉賀孫は本訳注（一）の（里1・3）条に既出（その注（4）を参照）。

（3）子貢に…言ふ、と―「告子貢一以貫之章、集注云、彼以行言、此以知言」は、『論語』衞霊公篇第二章の経文、およびその『集注』に見られる。（里15・44）条に既出（その注（3）を参照）。

（4）大學或…理なり―「大學或問云、心之爲物、實主於身。其體、則有仁義禮智信之性。其用、則有惻隱、羞惡、恭敬、是非之情。渾然在中、隨感而應。以至身之所具、身之所接、皆有當然之則而自不容已、所謂理也」は、『大学或問』において、『大学章句』伝第五章のいわゆる「格物補伝」についての説明の中に見られる。『或問』には「或問、此謂知本、其一爲聽訟章之結語、則聞命矣。……曰、吾聞之也。天道流行、造化發育。凡有聲色貌象而盈於天地之間者、皆物也。既有是物、則其所以爲是物者、莫不各有當然之則、而自不容已、是皆得於天之所賦、而非人之所能爲也。今且以至切而近者言之、則心之爲物、實主於身、其體則有仁義禮智之性、其用則有惻隱羞惡恭敬是非之情、渾然在中、隨感而應、各有攸主、而不可亂也。次而及於身之所具、則有口鼻耳目四肢之用。又次而及於身之所接、則有君臣父子夫婦長幼朋友之常。是皆必有當然之則、而自不容已、所謂理也。外而至於人、則人之理不異於己也。遠而至於物、則物之理不異於人也。……」とあり、本条の語は、『或問』の言葉を節録したものである。

（5）通所の…則ち一―「通書一處說陰陽五行、化生萬物、五殊二實、二本則一」は、『通所』理性命第二十二には「二氣五行、化生萬物。五殊二實、二本則一。是萬爲一、一實萬分。萬一各正、大小有定」とあり、朱子は「此言命也。二氣五行、天之所以賦受萬物而生之者也。自其末以緣本、則五行之異、本二氣之實、二氣之實、又本一理之極。是合萬物而言之、爲一太極而已也。自其本而之末、則一理之實、而萬物分之以爲體。故萬物之中、各有一太極、而小大之物、莫不各有一定之分也」と注釈する。

（6）鄉黨―「鄉黨」は、『論語』鄉党篇。孔子の公私にわたる起居を取り上げて、言貌、衣服飲食などを記したものである。『集注』には「楊氏曰、聖人之所謂道者、不離乎日用之間也。故夫子之平日、一動一靜、門人皆審視而詳記之。尹氏曰、甚矣孔門諸子嗜學也。於聖人之容色言動、無不謹書而備錄之、以貽後世。今讀其書、卽其事、宛然如聖人之在目也。雖然、聖人豈拘拘而爲之者哉。蓋盛德之至、動容周旋、自中乎禮耳。學者欲潛心於聖人、宜於此求焉」とある。

（7）明道の…を説く―「明道說忠恕」とある明道の語は、『論語精義』巻第二下に「明道曰、維天之命、於穆不已、不其忠乎。天地變化、草木蕃、不其恕乎。又曰、以己及物、仁也。推己及物、恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之、忠者天道、恕者人道、忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用、大本達道也。此與違道不遠異者、動以天耳。【一本作、以己及物謂之仁、推己及物謂之恕。忠者、无妄之謂也。忠、天道也、恕、人事也。忠爲體、恕爲用。忠恕違道不遠、非一以貫之忠恕也。一作、忠恕一貫、忠者天下大公之道、恕所以行之也。忠言其體、天道也。恕言其用、人道也。】又曰、忠恕兩字、要除一箇除不得」とある。なお「以己及物、仁也。推己及物、恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之、忠者天道、恕者人道、忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用、大本達道也。此與違道不遠異者、動以天耳」の語は『程氏遺書』巻第十一に見られる（「違道不遠是也」の語が割注の体裁をとる）。また明道の語は、『集注』にも圏外の説として採られている。

（8）賀孫―「賀孫」は、葉賀孫、本条の筆録者。本条注（2）に既出（その注（2）を参照）。

[里15・48／二七・四十八](1)

本　文

曾子一貫忠恕、是他於事物上各當其理。日用之間、這箇事見得一道理、那箇事又見得一道理、只是未曾湊合得。聖人知其用力已到、故以一貫語之。問、曾子於零碎曲折處都盡得、只欠箇一以貫之否。曰、亦未都盡得。但是大概已得、久則將自到耳。問、君子之道費而隱、曾子於費處已盡得、夫子以隱處點之否。曰、然。問、曾子篤實、行處已盡。聖人以一貫語之、曾子便會、曰忠恕而已矣。子貢明敏、只是知得。聖人以一貫語之、子貢尚未領略、曰然、非與。是有疑意。曰、子貢乃是聖人就知識學(2)問語之、曾子、就行上語之、語脉各不同。須是見得夫子曰吾道一以貫之意思、先就多上看、然後方可說一貫。

此段恕字却好看、方泝[3]流以遡其源。學者寧事事先了得、未了得一字、却不妨。莫只懸空說箇一字作大罩了、逐事事都未曾理會、却不濟事。所以程子道、下學而上達、方是實。又云、如人做塔、先從下面大處做起、到末梢自然合尖。若從尖處做、如何得。【僩】

校　勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」では、(里15・49) 条の割注に見える。
(2) 學―「學」は、楠本本「子曰參乎章」49条の割注は「上」に作る。
(3) 泝―「泝」は、正中書局本・朝鮮整版本・楠本本「子曰參乎章」49条の割注は「沿」に作る。

訓　読

曾子の一貫忠恕は、是れ他 事物の上に於いて 各(おのおの)其の理に當たる。日用の間、這箇の事に一の道理を見得し、那箇の事に又一の道理を見得するも、只是(た)だ未だ曾て湊合し得ず。聖人 其の力を用ふること已に到るを知りて、故に一貫を以て之に語(つ)ぐ。問ふ、曾子は零碎曲折の處に於いて都て盡く得て、只だ箇の「一以て之を貫く」を欠くるや否や、と。曰はく、亦た未だ都て盡くは得ず。但是(た)だ大概已に得て、久しければ則ち將に自から到らんとするのみ、と。問ふ、「君子の道は費にして隱なり」と、[1]曾子は費なる處に於いて已に盡く得て、夫子は隱なる處を以て之に點するや否や、と。曰はく、然り、と。問ふ、曾子は篤實にして、行ふ處已に盡くす。聖人は一貫を以て之に語げ、曾子は便ち會して、「忠恕のみ」と曰ふ。子貢は明敏にして、只是だ知得するのみ。聖人は一貫を以て之に語げ、子貢は尚ほ未だ領略せず、「然り、非なるか」

と曰ふ。是れ疑ひの意有るか、と。曰はく、子貢は乃ち是れ聖人 知識學問に就きて之に語げ、曾子は、行の上に就きて之に語げ、語脉 各 同じからず。須是(すべか)らく夫子の「吾が道一以て之を貫く」と曰ひし意思を見得するには、先づ多くの上に就きて看て、然る後に方めて一貫を說く可し。此の段は「恕」の字却つて好く看よ、方に泝流して以て其の源に遡らん。學ぶ者は寧ろ事事に先づ了(さと)り得とも、未だ「一」の字を了り得ざるは、却つて妨げず。只だ懸空に箇の「一」の字を說きて大罩と作し了はり、事事を逐ひて都て未だ曾て理會せず、却つて事を濟さざる莫かれ。所以に程子「下學して上達す」るは、方に是れ實なりと道ふ、と。[2] 又云ふ、人の塔を做るが如きは、先づ下面の大なる處より做り起こし、末梢に到りて自然に合に尖なるべし。若し尖なる處より做らば、如何ぞ得ん、と。【沈僩[3]】

口語訳

曾子の一貫忠恕については、彼は事物に対して逐一道理を弁えていた。ふだんから、この事に一つ道理を理解し、あの事にまた一つの道理を理解したが、まだ総合することができなかった。聖人は曾子の努力がもう到達したと分かったので、一貫を曾子に告げた。

質問した、「曾子は細々したところではもうすっかりできていたが、「一以て之を貫く」ところを欠いていたのでしょうか」と。

答えて言う、「まだすっかりできてはいない。しかしだいたいもうできていて、時間がたてばおのずと到達するばかりであった」と。

質問した、「(『中庸章句』第十二章に)「君子の道は費にして隠なり」とあり、曾子は「費」(作用が広大)なる処でも

う十分できていて、夫子は「隠」（本体が微妙）なる処を曾子に指摘したのでしょうか」と。

答えて言う、「その通りである」と。

質問した、「曾子は堅実で、実践はもうやり尽くしています。聖人が一貫の語を曾子に告げると、曾子はすぐに理解して、「忠恕のみ」と言いました。子貢は聡明で、ただ知るだけでした。聖人が一貫の語を子貢に告げると、子貢はまだ理解せず、「然り、非なるか」と言いました。これは疑念を抱いているのでしょうか」と。

答えて言う、「子貢の場合は、聖人は知識学問について子貢に告げ、曾子の場合は、実践について曾子に告げ、文脈はそれぞれ違うのだ。ぜひ夫子の「吾が道一以て之を貫く」と言った趣旨を理解するには、先に多くのことを見て、そこではじめて一貫を説くのがよい。この文章は「恕」の字をよく見なさい、流れをさかのぼって本源をたずねることになろう。学ぶ者はむしろ事毎に先に理解したとしても、まだ「一」の字を理解できないことは、差し支えない。ただ実際からかけ離れてこの「一」の字を説いて覆ってしまい、事々をまったく理解せず、役に立たないのはいけない。ゆえに程子が「下学して上達す」るのは、まさに実である」と言ったのだ」と。

また言う、「人が塔を建てる場合、最初に下の大きなところから作り始めれば、末端になると自然に尖るようになるはずである。もし尖ったところから作るならば、どうして出来上がろうか」と。【沈僩録】

注

（1）君子の…なり」と―「君子之道費而隠」は、『中庸章句』第十二章にある語。朱子は「費、用之廣也。隠、體之微也」と注する。

（2）所以に…道ふ、と。―「所以程子道、下學而上達、方是實」は、「下學而上達、方是實」を程子の語とするが、出所については未詳。

なお「下學上達」の語をもって解するものが、『論語精義』巻第二下に程伊川の語として「聖人之教人、各因其才。故孔子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。蓋惟曾子爲能達此、孔子所以告之也。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。曾子之告門人、猶夫子之告曾子也。忠恕違道不遠、斯下學上達之義、與堯舜之道孝弟而已矣同。世儒以爲夫子道高遠、而曾子未足以見之、所見者止於忠恕而已、則是堯舜之道、孟子知之亦有所不盡而止孝弟也。夫豈知其旨哉」とあり、ほぼ同意のものが『集注』圏外の説に採られている。「下學而上達」は、憲問篇第三十七章に「子曰、莫我知也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎」とあり、朱子は「不得於天而不怨天。不合於人而不尤人。但知下學而自然上達。此但自言其反己自脩、循序漸進耳。無以甚異於人、而致其知也。然深味其語意、則見其中自有人不及知、而天獨知之之妙。蓋在孔門、惟子貢之智、幾足以及此。故特語以發之。惜乎、其猶有所未達也。○程子曰、不怨天、不尤人、在理當如此、又曰、下學上達、意在言表。又曰、學者須守下學上達之語。乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣」と注する。

(3) 倜―「倜」は、沈倜。沈倜は本訳注（一）の（里1・1）条に既出（その注（5）を参照）。

[里15・49／二七・四十九]

本　文

問、曾子一貫、以行言、子貢一貫、以知言、何也。曰、曾子發出忠恕、是就行事上說。孔子告子貢、初頭說多學而識之、便是就知上說。曾子是就源頭上面流下來、子貢是就下面推上去。問、曾子未聞一貫之前、已知得忠恕未。曰、他只是見得聖人千頭萬緒都好、不知都是這一心做來。及聖人告之、方知得都是從這一箇大本中流出。如木千枝萬葉都好、都是(1)這根上生氣流注去貫也。林問、枝葉便是恕否。曰、枝葉不是恕。生氣流注貫枝葉底是恕。信是枝葉受生氣底、恕是夾界半路來往底。信是定底、就那地頭說。發出忠底心、便是信底言。無忠、便無信了。【淳。謨錄云(2)、曾子一貫、以行言、子貢一貫、以知言。曾子言夫子忠恕、只是就事上看。夫子問子貢多學而識之、便是知上說。曾子見夫子所爲千頭萬緒、一一皆好。譬如一樹、枝葉花實皆可愛、而其實則忠信根本、恕猶氣之貫(3)注枝葉、若論信、則又如花之必誠(4)實處。忠信、忠恕皆是體用。

恕如行將去、信如到處所。循物無違、則是凡事皆實。譬如水也、夫子、自源而下者也、中庸所謂忠恕、泝流而上者也。】

校　勘

（1）是―「是」は、楠本本「子曰參乎章」には「是」の下に「從」字が有る。
（2）謨錄云―「謨錄云」以下の割注は、楠本本「子曰參乎章」の本条には無く、前条の校勘に述べたように48条本文と同文が見える。
（3）貫―「貫」は、和刻本は「實」に作る。
（4）誠―「誠」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本は「成」に作る。

訓　読

問ふ、曾子の一貫は、行を以て言ひ、子貢の一貫は、知を以て言ふは、何ぞや、と。曰はく、曾子 忠恕を發出するは、是れ行事の上に就きて說く。孔子 子貢に告ぐるに、初頭に「多く學びて之を識す」と說くは、便是ち知の上に就きて說く。曾子は是れ源頭の上面に就きて流下し來り、子貢は是れ下面に就きて推上し去く、と。問ふ、曾子未だ一貫を聞かざるの前、已に忠恕を知得するや未だしや、と。曰はく、他は只是だ聖人の千頭萬緒都て好きを見得するも、都是て這の一心の做し來るを知らず。聖人之に告ぐるに及びて、方めて都是て這の一箇の大本の中より流出するを知得す。如へば木の千枝萬葉の都て好きは、都是て這の根の上の生氣 流注し去きて貫けばなり、と。林[1]問ふ、枝葉は便是ち恕なるや否や、と。曰はく、枝葉は是れ恕に不ず。生氣 流注して枝葉を貫く底は是れ恕なり。信は是れ枝葉の生氣を受くる底にして、恕は是れ夾界半路に來往する底なり。信は是れ定まる底なるは、那の地頭に就きて說く。忠の心を發出するは、便是ち信の言あり。忠無ければ、便ち信無くして了はる、と。【陳淳[2]。謨[3]の錄に云ふ、曾子の一貫は、行を以て言ひ、子貢の一貫は、

知を以て言ふ。曾子 夫子を忠恕と言ふは、只是だ事上に就きて看る。夫子 子貢に「多く學びて之を識す」と問ふは、便是ち知上に說く。曾子 夫子の爲す所の千頭萬緒、一一皆 好きを見る。譬如(たと)へば一樹の枝葉花實皆 愛す可くんば、而(すなは)ち其の實は則ち忠信は根本にして、恕は猶ほ氣の枝葉に貫注するがごとく、若し信を論ずれば、則ち又 花の必ず實を誠(な)す[4]處の如し。忠信、忠恕皆 是れ體用なり。恕は行ひ將て去くが如し、信は到る處所の如し。物に循ひて違ふこと無ければ、則ち是れ凡そ事は皆實なり。譬如へば水や、夫子は、源よりして下る者なり、中庸に所謂 忠恕は、泝流して上る者なり、と。[5]】

口語訳

質問した、「曾子の一貫は、行に基づいて言い、子貢の一貫は、知に基づいて言うとは、どういうことですか」と。

答えていう、「曾子が忠恕を案出したのは、行いについて説いている。孔子が子貢に告げた際に、最初に「多く学びて之を識す」と言ったのは、知について説いている。曾子は水源の上から流れ下り、子貢は下から押し上げていくのだ」と。

質問した、「曾子はまだ一貫を聞く前に、もう忠恕を知っていたのでしょうか」と。

答えて言う、「彼は聖人が雑多な事物でもすべてきちんとしていると知っていたが、すべては一つの心が行っているとは知らなかった。聖人が告げて、初めて大本より流れ出ていることが分かった。木は多くの枝葉がすべて立派なのは、みな根からの生気が流れ注いで貫いているからである」と。

林が質問した、「枝葉は恕なのでしょうか」と。

答えて言う、「枝葉は恕でなない。生気が流れ注いで枝葉を貫くものが恕である。信は枝葉が生気を受けたものであって、恕はあちこち動いているものである。信は定まったものとは、その観点から説いている。忠の心を発出するのは、信のあ

る言葉である。忠が無いとなると、信も無いのだ」と。【陳淳録。周謨（字は舜弼）の記録に言っている、「曾子の一貫は、行の観点から言い、子貢の一貫は、知の観点から言う、とある。曾子が夫子（の道）は忠恕（のみ）と言ったのは、実践から見ている。夫子が子貢に「多く学びて之を識す」と質問したのは、知の面について言っている。曾子は夫子の行う複雑なことも、一つ一つすべてきちんとしていると理解した。たとえば木の場合、枝葉花実みな愛らしいのは、実際は忠信が根本であり、恕はちょうど気が枝葉に注ぎ込むようだ。もし信を論ずるならば、また花が必ず実をつけるようなものである。忠信、忠恕はみな体用である。恕は実行していくようなもので、信は行き着いたところのようなものである。事物に沿って道理に悖ることが無ければ、すべて事物はみな実である。たとえば水のように、夫子は、源から下るものであり、『中庸』に言うところの忠恕は、流れを遡っていくものである」と。】

注

（1）林―「林」は、未詳。記録者である陳淳の師事期は、「語録姓氏」には第一次「庚戌（紹熙元年、一一九〇）」、第二次「己未（慶元五年、一一九九）」と記されている。「語録姓氏」記載の中で記録年のみ同じ人物に、「林學履（字は安卿、永福（福建永泰県）の人、己未所録）」がいる。また『年攷』には、陳淳の第二次師事期における同門弟子として「林用中（字は擇之、福州古田県（福建）の人）、第一五三～一五五頁」を、さらに朱子の知漳州在任中の師事が確認される記録者である陳淳と同席する人物として「林易簡（字は一之、漳州（福建龍溪県）の人、第一四〇～一四一頁）」をあげており、何れかは特定できない。

（2）淳―「淳」は、陳淳。本条の筆録者。陳淳は本訳注（一）の（里1・2）条に既出（その注（3）を参照）。

（3）謨―「謨」は、周謨。周謨は本訳注（一六）の（里10・2）条に既出（その注（1）を参照）。

（4）實を誠す―「誠實」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本に「成實」とあり、「誠」を「成」字として読んだ。

（5）中庸に…謂忠恕―「中庸所謂忠恕」は、『中庸章句』第十三章に「子曰、道不遠人。人之爲道而遠人、不可以爲道。詩云、伐柯伐柯、其則不遠。執柯以伐柯、睨而視之、猶以爲遠。故君子以人治人、改而止。忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」とある。朱

子は「盡己之心爲忠、推己及人爲恕。違、去也。如春秋傳齊師違穀七里之違。言自此至彼、相去不遠。非背而去之之謂也。道卽其不遠人者是也。施諸己而不願、亦勿施於人、忠恕之事也。以己之心、度人之心、未嘗不同。則道之不遠於人者可見。故己之所不欲、則勿以施之於人。亦不遠人以爲道之事。張子所謂以愛己之心愛人則盡仁、是也」と注する。

[里15・50／二七・五十](1)

本　文

或問夫子告曾子以吾道一以貫之、與告子貢予一以貫之之說。曰、曾子是以行言、子貢是以知言。蓋曾子平日於事上都積累做得來已周密、皆精察力行過了、只是未透。夫子才點他、便透。如孟子所謂有如時雨化之者、是到這裏恰好著(2)得一陣雨、便發生滋榮、無所凝滯。子貢却是資質敏悟、能曉得、聖人多愛與他說話、所以亦告之。又問、尹氏云、此可見二子所學之淺深。曰、曾子如他與門人之言、便有箇結纜殺頭、亦見他符驗處。子貢多是說過曉得了便休、更沒收殺。大率子貢緣他曉得、聖人多與他說話、但都沒收殺。如子如不言處、也沒收殺。或曰、他言性與天道處、却是他有得處否。曰、然。【燾】

校　勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。
(2) 著―「著」は、正中書局本・和刻本は「着」に作る。

訓　読

或ひと　夫子　曾子に告ぐるに「吾が道一以て之を貫く」を以てすと、子貢に「予一以て之を貫く」を告ぐるの說とを問ふ。

曰はく、曾子は是れ行を以て言ひ、子貢は是れ知を以て言ふ。蓋し曾子は平日事上に於いて都て積累して做し得て來ること已に周密にして、皆精察力行し過ぎ了はるも、只是(た)だ未だ透らざるのみ。夫子才(わづ)かに他に點すれば、便ち透る。孟子の所謂「時雨の之を化するが如き者有り」(1)の如く、是れ這裏に到りて恰好に一陣の雨を著し得れば、便ち發生し滋榮し、凝滞する所無し。子貢は却(か)是(へ)つて資質敏悟にして、能く曉り得て、聖人は多く他と說話するを愛す、所以に亦た之に告ぐ、と。又尹氏の此れ二子の學ぶ所の淺深を見るべしと云ふ(2)を問ふ。曰はく、曾子の他と門人との言の如きは、便ち箇の結纜殺頭(3)有り、亦た他の符驗する處を見る。子貢は多く是れ說過し曉り得て了はれば便ち休(や)む、更に收殺する沒(な)し。大率(おほむ)ね子貢は他の曉り得るに緣(よ)り、聖人は多く他と說話するも、但だ都て收殺する沒きのみ。「子如し言はざれば」(4)の處の如きも、也た收殺する沒し、と。或ひと曰はく、他の「性と天道とを言ふ」(5)の處は、却是つて他に得る處有りや否や、と。曰はく、然り、と。【呂燾(6)】

口語訳

ある人が、孔子が曾子に「吾が道一以て之を貫く」と告げたのと、子貢に「予一以て之を貫く」と告げた說について質問した。

答えて言う、「曾子へは行によって言い、子貢へは知によって言っている。思うに曾子はふだん実事に当たってみな積み重ねた実践がよく行き届き、すでによく考えて努めていたが、まだ到達しなかったのである。孔子が指摘するや、たちまち到底した。孟子が言うところ（尽心上篇第四十章）の「時雨の之を化するが如き者有り」のように、ここ（人力已至、而未能自化）まで到達してちょうど一陣の雨が降れば、芽生えて茂り、とどまることが無い。子貢は生まれつき利発で、

よく理解したので、聖人孔子は彼とよく話をした、それゆえ子貢に告げたのである」と。

さらに尹氏（**焞**）が、ここで二人の学びの深浅の度合いが分かると言っている語について質問した。

答えて言う、「曾子と門人との言葉などは、よく締めくくられていて、符合していることが分かる。子貢は多くは話し終えて理解できればやめてしまい、成果を挙げなかった。だいたい子貢は自分が理解できたことに基づき、聖人孔子は彼とよく話をしたが、まったく成果を挙げなかったのである。（『論語』陽貨篇第十九章）「子如し言はざれば」の箇所なども、また成果を挙げていない」と。

ある人が言う、「子貢の「性と天道とを言ふ」の箇所は、彼に理解したことが有ったのでしょうか」と。

答えて言う、「その通りである」と。【呂燾録】

注

（1）孟子の…者有り―「孟子所謂有如時雨化之者」は、『孟子』尽心上篇第四十章に「孟子曰、君子之所以教者五。有如時雨化之者。有成德者。有達財者。有答問者。有私淑艾者。此五者君子所以教也」とあり、「有如時雨化之者」の朱注に「時雨、及時之雨也。草木之生、播種封植、人力已至、而未能自化。所少者雨露之滋耳。及此時而雨之、則其化速矣。教人之妙亦猶是也。若孔子之於顔曾是已」とあり、「有成德者。有達財者」の朱注に「財、與材同。此各因其所長而教之者也。成德、如孔子之於冉閔。達財、如孔子之於由賜」とある。

（2）尹氏の…と云ふ―「尹氏」は、尹**焞**（一〇七一～一一四二）。字は彦明（また德充）、号は三畏齋・和靖処士。「尹氏云、此可見二子所學之淺深」は、『論語精義』巻第二下には「尹曰、道無二也。一以貫之、天地萬物之理畢矣。曾子於聖人之門造道最深。夫子不待問而告、曾子聞之亦弗疑也。故唯而已。其答門人則曰忠恕者、盡己之謂忠、推己之謂恕。然則忠恕果可以一貫乎。忠恕違道不遠者也。若夫子貢、以夫子多學而識之爲然、始謂之曰吾一以貫之。則二子之學、淺深可見也。又曰、忠恕一事也。主於内爲忠、見於外爲恕」とある。

（3）結纜殺頭―「結纜殺頭」は未詳。語類中にこの一例しか見えない。

（4）子如し…ざれば―「子如不言」は、『論語』陽貨篇第十九章に「子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉」とあり、朱子は「學者多以言語觀聖人、而不察其天理流行之實、有不待言而著者。是以徒得其言、而不得其所以言。故夫子發此以警之」「子貢正以言語觀聖人者。故疑而問之」「四時行、百物生、莫非天理發見流行之實、不待言而可見。聖人一動一靜、莫非妙道精義之發、又天而已。豈待言而顯哉。此亦開示子貢之切。惜乎、其終不喩也。○程子曰、孔子之道、譬如日星之明、猶患門人未能盡曉。故曰、予欲無言。若顏子則便默識。其他則未免疑問。故曰小子何述。又曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、則可謂至明白矣。愚按、此與前篇無隱之意相發。學者詳之」と注する。

（5）性と天…を言ふ―「言性與天道」は、『論語』公冶長篇第十二章に「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也」とあり、朱子は「文章、德之見乎外者、威儀文辭皆是也。性者、人所受之天理。天道者、天理自然之本體、其實一理也。言夫子之文章、日見乎外、固學者所共聞。至於性與天道、則夫子罕言之、而學者有不得聞者。蓋聖門教不躐等。子貢至是、始得聞之、而歎其美也。○程子曰、此子貢聞夫子之至論、而歎美之言也」と注する。

（6）燾―「燾」は、呂燾。呂燾は本訳注（三）の（里2・1）条に既出（その注（4）を参照）。